

水戸芸術館音楽紙[ヴィーヴォ]

vivo

9 SEPTEMBER 2003

CONTENTS

- 早島万紀子インタビュー1、2
- 茨城の名手・名歌手たち第14回&
高山三智子延期公演3
- 最近の公演から4
- ネッタマ5
- インフォメーション6



「メシアン」の肖像」公演(1993年)より



「オルガンの向こうには未知への扉が開かれているような感覚をもっています」

9 / 29(月)早島万紀子オルガン・リサイタル

わが国を代表するオルガニストのひとりであり、とりわけフランス・オルガン音楽の演奏で、多くの聴衆を魅了しているのが早島万紀子さんです。早島さんといえば、大きな感動を巻き起こした伝説的な演奏会「メシアン」の肖像」公演(1993年 企画・若杉弘)をご記憶の方もいらっしゃるのではないのでしょうか。そして、10年の歳月を経て早島万紀子さんのソロ・リサイタルが実現します。演奏会に向けて水戸芸術館にリハーサルにいらした早島万紀子さんに、インタビューをさせていただきました。

パリ時代

早島さんは、東京芸術大学を卒業後、すぐにフランスに渡り、およそ12年半の間、パリを中心に活動されたそうですが、当時のお話を少しお聴かせ下さい。

早島:当時、芸大にはまだ、せまい練習室にしかオルガンはなく、パリに行って、はじめて大きなオルガンに触れることができました。シャピエイ先生のクラスでは、サン・セヴラン教会の大オルガンで授業もやっていたし、練習もさせてくれました。とにかく、最初の頃は、教会でたったひとりでオルガンに向き合うのは、おそろしいことでした。夜など、練習中に突然鳥が「パタパタパタ」と飛び音がしたりするだけで、びっくりしていました。

しかも教会というのは、誰もいなくても、聖なる何かが宿っている場所ですよ。神聖で、恐ろしくて、美しく……。オルガンのパイプも、鍵盤も、すべてのものが大きく見えて、そして自分がどうしようもなくちっぽけに見えました。オルガンの向こうには、未知への扉が開かれているような、喜びともつかない、言葉にあらわせないような感覚をいつも持ちながら、オルガンに接していました。それは、なにか私にとっての原体験のようなものだったのではないかと思います。今でもその時のショックから立ち直れていないような気がします。まだ、旅の途中、暗闇の中を歩いているような気がするのです。

フランス・オルガン音楽の魅力

音色の美しさというのが、フランス・オルガン音楽の魅力の大きな要素であると思うのですが、早島さんからみたフランス・オルガン音楽の魅力についてお話しください。

早島:音色の美しさといえば、たとえばドイツのオルガン音楽でも言えることでしょう。フランスのオルガン曲の凄さは、その組み合わせの妙味なのではないでしょうか。よく引き合いに出されるのがフランス料理です。古い時代から今日に至るまで、フランスの作曲家たちは、あたかも料理のレシピのように、音色の組み合わせ方の詳細を楽譜に

書いているのです。グリニやクーブランなどの古典作品では、例えば グラン・ジュ や プラン・ジュ といった、音色の組み合わせ方そのものが、曲の題名にもなっています。

そうした組み合わせの妙技によって、音色というのは無限にひろがり、様々な味覚が存在するように、多様で、色彩豊かなひびきをかもし出します。フランスのオルガンはその倍音構造などを見ても、とてもシンプルで合理的なものなのですが、そうした合理性と人間の持っている感覚が結びついたのがフランスのオルガン音楽です。その対比は、「数理的 / 感性的」、「揺らがないもの / 揺らぐもの」という言葉に置き換えても良いかも知れませんが、フランスのオルガン音楽は、両者の幸せなまでの結婚と言えるでしょう。ですから宗教音楽であっても、非常に官能的な側面を感じることがしばしばあります。

プログラム

今回のプログラムは、フランスのオルガン音楽の変遷を辿るかのよう、古典期のグリニの作品にはじまり、現代作曲家フローレンツの作品にまで至ります。それぞれの作品について、簡単にコメントをお願いします。

[グリニ:オルガン曲集より]

早島:グリニは今年没後300年を迎える作曲家で



「茨城の名手・名歌手たち
第14回」出演者

早島万紀子



森田泰明



村上加奈



会沢明美



小橋琢水



矢口幸一



飯塚公美

す。J.S.バッハと同じくらい、フランスでは高く評価されています。フランスの黄金期を飾った巨匠に敬意を表しつつ、演奏をしたいと思います。

フランスの古典期のオルガン曲というのは、わが国では、かつてはあまり演奏されていなかったような気がしますが。

早島:10年位前から、日本に多くフランス製のオルガンが、設置されるようになりました。それと連動するかのように、クレランボーやクーブランやグリニなどの作品が取り上げられる機会が増え、現在ではこれらの作品の演奏は、当り前のように行なわれています。10年前には考えられなかったことですね。

【フランク:カンタービレ】

早島:フランスの音楽は、他の地域の影響を受けながら発展してきました。それはフランスに限らず、あらゆる文化に対して言えることかもしれませんが、とりわけフランスはそうした異質なものを受容し、自らの文化を豊かにしていくことに、寛容で積極的な姿勢をもっているように考えられます。その典型とも言えるのがフランクです。フランクは、ゲルマン人ですが、フランスに帰化した作曲家で、フランス近代オルガン音楽の創始者のように言われています。フランク作品の演奏では、そうした異文化の受容というところを追っていきたくも思っています。

【ヴィエルヌ: 幻想小曲集 より】

早島:ヴィエルヌと言えば、オルガン交響曲はよく演奏されますが、この作品の演奏機会はあまり多くありません。しかし、オルガン音楽において、もっとも「印象主義」と呼ぶに相応しいのが、この作品ではないかと思っています。そうしたフランスならではのひびきをオルガンで追及した、優れた作品を、今回取り上げようと思いました。また、この作品は教会での典礼のことを考えずに、純粹に音楽会での演奏のために書かれたのではと考えられています。ヴィエルヌは、幸せにも望み通り、ノートルダム・大聖堂でオルガンを弾いている途中で息を引き取ったのだそうです。日本でいう「大正口マン」とも重なりそうな、フランスの「ベル・エポック」の甘美な香りに溢れた作品を楽しんでいただきたいと思います。

【デュリュフレ:アランの名による前奏曲とフーガ】

早島:デュリュフレという作曲家は、カトリックの教会で歌われ続けている旋法和声の洗練の限りを尽くした人です。この作曲家の色彩というのは、ほんとうにフランス人らしいものです。デュリュフレは、サンティエヌ・デュ・モン教会のオルガニ

ストを務めていました。この教会は、その佇まいがとても美しいのです。炎のような形の装飾が印象的なフランポアイヤン様式(*1)による建築物で、内部はアラベスク文様(*2)の装飾が施されています。白い石と水色のステンドグラスの柔らかな光が印象的です。私は、初めて訪れた時、扉をあけたとたんに、デュリュフレのレクイエムが流れているような気がしました。そして、デュリュフレは、この教会の中で生まれるべくして生まれた、あたりまえの音楽を書いたのだと思ったのです。それほどデュリュフレの音とサンティエヌ・デュ・モン教会の色彩には一体感を覚えました。

アランの名による前奏曲とフーガは1940年代の作品で、亡き作曲家ジュアン・アランのことを想い、彼の名前から音型を作り、その主題がまさにアラベスク文様のごとく散りばめられているのです。私がサンティエヌ・デュ・モン教会で接したようなアラベスク文様を、皆さんにイメージしていただくような演奏ができればと思っています。

(*1)フランポアイヤン様式:15世紀から16世紀の後期フランス・ゴシック様式。窓などの装飾が、火炎の燃え上がるような形状をしている。

(*2)アラベスク:フランス語で「アラビア風」の意味。優美な渦巻き曲線が直線や放射状の星形文様とリスミカルに錯綜する、シンメトリカルな装飾文様・花草文様を指すことが多い。

【メシアン: 聖霊降臨祭のミサ より】

早島:この曲が書かれたのは1950年代で、メシアンの代表的な作品のひとつです。メシアンは作曲家である前に、オルガニストとしてトリニテ教会などで毎日オルガンを演奏し、神に奉仕していました。メシアン級のオルガニストになると、ミサの演奏は即興でやっていたそうです。そして、この作品は、その即興の集大成と言われています。この曲では、メシアンの大きな特徴のひとつである、色々な鳥の音が登場します。かつて私は、20年ほど前、友人のオルガニストのミサの演奏を手伝いに、パリの18区の教会に行ったことがあります。そこは、小さなカヴァイエ・コル・オルガンが置かれてある小さな教会だったのですが、そこにメシアンさんと奥さんでピアニストのイヴォンヌ・ロリオさんが礼拝に来ていたのです。わたしは、おふたりの姿を見て、とても感動しました。おそらくそこが、彼らの近所の教会だったのでしょう。メシアンにとって、トリニテ教会の大オルガンを弾く時だけが、教会を訪れる機会というのではなく、普段からこうして教会に足を運んでいたんですね。

【フローレンツ: ロード (エチオピア教会・朝のミサのための7つの小品)】

早島:この作品は、ダニエル・ビルストというオルガ

ン・ビルダーがフランス南西部の教会に新しいオルガンを作り、そのお披露目の際に委嘱されたものです。ビルストはスペインとも縁が深く、この新しいオルガンは、そうしたスペインの音が随分取り入れられたユニークなものでした。実は、フローレンツは当初、このオルガンのためだけに、ロードを書きました。これはある意味フローレンツが、フランスのオルガン音楽を作る上での伝統を守り通している証でもあるような気がします。つまり、彼の音楽は、真の意味で音色や響の具体性ももち続けているのです。具体的な音色というのは、言ってみれば音楽の肉体です。それと観念的な世界を一体化させようとするフランスの伝統を、彼は今なお探究しているのです。ちなみに、ロードは、第2版でどこのオルガンでも演奏出来るように、改訂されています(笑)。

ロードは、フローレンツが書いた聖母マリアに捧げる3部作の真ん中に位置する作品です。3部作の中で、聖母マリアの生涯の色々な部分が表現されています。最初の作品は、テノールと混声合唱とオーケストラのためのオラトリオで、マリアの喜びの神秘を題材としています。3曲目は聖母のレクイエムと題されたオペラで、ソプラノ、テノール、バリトン、児童合唱、混声合唱とオーケストラのために書かれた作品で、マリアの栄光の神秘を題材にしています。そして、2曲目にあたるロードには、マリアの苦しみと悲しみの神秘が充てられています。エチオピアの大地に根付いた、単なる雰囲気では終わらない、祈りの深い意味が表現されている作品です。アフリカの楽器を模倣した表現に加え、この曲には弔鐘が多く出てきます。ロードは、マリアの嘆き、苦しみをテーマにしていますが、作曲家は当時起こったエチオピアの紛争を重ね合わせていたようです。現代の紛争を嘆く聖母マリアを描こうという想いがあったのではないのでしょうか。

最後に、水戸の聴衆に向けてメッセージをお願いします。

早島:音楽をひびきの中で充分に楽しんでいただきたいと思います。是非、「オルガン浴」をしてください!!「森林浴」とか「温泉浴」とかと同じように「オルガン浴」です(笑)。オルガンの色々な音をお聴かせできるプログラムです。お楽しみに!!

【中村】

水戸芸術館のホームページ[<http://www.arttowermito.or.jp/>]で、本インタヴューのロング・ヴァージョンを掲載しています。どうぞご覧下さい。



アーク・トリオ



和泉純子



坪内友紀子



見角悠代



清水知子



高山三智子

明日を担う若い音楽家たちが、ここから巣立ちます。

9 / 13(土)茨城の名手・名歌手たち第14回 司会：畑中良輔

歴史を重ねる「名手・名歌手たち」

茨城県に関わりのある音楽家を広く紹介し、県内や全国の音楽シーンに新しい才能を送り込んできた「茨城の名手・名歌手たち」。水戸芸術館開館以来、毎年続けられているこの企画も今年で第14回を迎えます。

過去にご紹介してきた「名手・名歌手たち」は、204名(ソロ)と9組(アンサンブル)にのぼります。彼らが県を代表する音楽家の1人として、演奏や教育の分野で様々な活躍を続けているのは、皆さまもご存知のことでしょう。中には、第1回音楽堂日本歌曲コンクール第1位の小泉恵子さん(ソプラノ)、ロン＝ティボー国際音楽コンクール第5位の大崎結真さん(ピアノ)、第66回日本音楽コンクール第2位(1位なし)の清水良一さん(バリトン)など、国内外の大舞台で活躍する音楽家もここから巣立っています。

こうした「名手・名歌手たち」出身者には、「クリスマス・コンサート」「プロムナード・コンサート」「ヴァリエーションズ」「市民オペラ」「市民芸術祭」など、水戸芸術館の他の企画にご出演いただくこともあります。オーディションとその合格者による演奏会だけでなく、その先にもう1ステップあるかもしれない。そうした期待があるだけに、「茨城

の名手・名歌手たち」は毎年ひときわ「熱いもの」を私たちに届けてくれるのかもしれませんが。

華やかなガラ・コンサート

9月13日の演奏会に出演するのは、管楽器4、声楽6、器楽アンサンブル1の合計11組。5月11日に行われた出演者オーディション(応募総数：88)で、厳しい審査を通過した素晴らしい才能の持ち主たちです。演奏会では、オーディション審査委員長の畑中良輔氏が司会を務め、出演者と曲目をご紹介しながら、ガラ・コンサート形式で進めていきます。

まず声楽からは、ソプラノ5名とバリトン1名が出演。上述のバリトン歌手・清水良一さんの奥様でもある清水知子さんは、椿姫の aria「ああ、そはかの人か...花から花へ」を歌います。オーディションでは「トゥーランドット」の aria「お聞きください、王子様」を歌い、艶やかな美声と圧倒的な声量で審査委員の先生方をうならせていただけに、期待が高まります。その他、男声では唯一人の出演となるバリトンの小橋琢水さんが、オーディション時にも力強い歌唱を聴かせた「仮面舞踏会」のレナートの ariaを歌うほか、会沢明美さん(畑中良輔 八木重吉による五つの歌 ほか) 和泉純

子さん(魔弾の射手 アーテの祈りの aria)、坪内友紀子さん(カタラーニ ワリー の aria ほか)、見角悠代さん(アリアーピエフ 夜うぐいす、小林秀雄 花の春告鳥 ほか)が出演します。

管楽器では、オーディション時、ストラヴィーンスキの無伴奏クラリネットのための3つの小品で確かな技巧と音楽性を聴かせた飯塚公美さんが、レーガールのクラリネット・ソナタ(抜粋)ほかを披露。さらに、トランペットの矢口幸一さん(ハルトゥニヤンの協奏曲)、トロンボーンの新田泰明さん(ピースリー アロウズ・オブ・タイム)、ユーフォニアムの村上加奈さん(ギリンガム ブルー・レイク・ファンタジー)が出演、各楽器の持ち味を存分に聴かせてくれることでしょう。

器楽アンサンブルからは、アーク・トリオ(ピアノ：清水美和さん、ヴァイオリン：関口桂代さん、チェロ：宇野哲之さん)が出演。今年結成されたばかりというフレッシュなアンサンブルが、スペインの作曲家トゥリーナの「円」を演奏します。

以上、今年もバラエティ豊かで個性的な顔ぶれが勢揃い。新たな「名手・名歌手たち」の誕生を、どうぞ暖かく見守ってください。

《関根》

Portrait

遂に延期公演が実現!! 舞台にかけるピアニストの熱い想い

9 / 5(金)高山三智子ピアノ・リサイタル

Portrait

高山三智子さんの緊急入院のため、今年の4月に予定していた公演は延期となってしまいました。演奏会を楽しみにして下さっていた皆様にはたいへんご迷惑をおかけしましたが、その後高山さんのご体調は順調に回復され、9月にあらためて公演を開催できることとなりました。なお、本公演は「茨城県内在住の演奏家による企画」シリーズの一環として実施します。

今回のアクシデントを通して、感動的であったのは、まさに命を賭してまでピアノに向かおうとする高山さんの姿勢でした。筆者は、入院直後に高山さんの病室を訪ねたのですが、たいへん苦しんでいるようで、声をおかけすることはできません。付き添いの方のお話しによると、数日後に控えた演奏会には出られるのだろうかということば

かりをひたすらお医者さんに尋ねられていたとのことでした。即刻入院が必要な病状で、しかもたいへんな苦しみにもかかわらず、ご自身の身体をいたわること以上に、演奏会の開催を望まれる、そのお気持ちに、筆者は敬意を表せずにはいられませんでした。

演奏会のプログラムは、ベートーヴェンの「月光ソナタ」をはじめ、リスト「愛の夢」、メンデルスゾーン「春の歌」、ドビュッシー「月の光」、ショパン「別れの曲」など、美しい旋律であらゆる聴衆を魅了するピアノの名曲が目白押し。これらの作品が一夜で聴けてしまう、贅沢なコンサートと言えます。そして、演奏会の挿尾を飾るのは、ラフマーニョフの6つの楽興の時。モスクワ音楽院でヤコフ・フリエール教授に学んだ高山さんにとって、ロ

シア音楽はもっとも大切なレパートリーです。渾身のラフマーニョフ演奏に期待がかかります。

高山さんが一途に、生涯をかけて打ち込んでいく「音楽」というものは、一体何なのか、あらためて考えてみたくになります。そして、彼女は、ピアノを通して一体何を表現しようとしているのでしょうか? 演奏会に足をお運びになって、ぜひ、情熱溢れる高山さんのメッセージをお受けとめになってみませんか。

《中村》

本公演に関しては、2003年4&5月号にも紹介記事があります。合わせてどうぞご覧ください。なお、4月に予定していた公演のプログラムから一部変更があり、ベートーヴェンの「創作主題による15の変奏曲とフーガ 作品35」に代わり「ピアノ・ソナタ 第14番 作品27の2「月光」」が演奏されます。

最近の公演から

JUNE
JULY



1



2



3



4



5



6



7



8

水戸室内管弦楽団第54回定期演奏会 (6月7日、8日)

両日とも満席の盛況。「指揮者なし」水戸室内管弦楽団(MCO)の演奏会も、すでに確かな支持を得ていることが実感される。ゲストのミリヤム・コンツェンは2度目の登場であり、いっそうなやかにMCOとのアンサンブルを奏でる姿に絶賛が集まったが、他の2曲もMCOの管・弦セッションそれぞれの魅力が楽しめるあつてか、アンケートで人気を集めていた。MCOメンバーも、自らの提案により開演前にエントランスホールで「ウェルカム・コンサート」を実施するなど大張り切り。フルート2本によるベートーヴェン：アレグロとメヌエット長調WoO26、そして木管八重奏によるモーツァルト：セレナード 変ホ長調 K.375 からの第2楽章メヌエットが、開演前の高揚した空気をいっそう高めた。また当日のゲネプロは市内および周辺市町村の児童生徒さんに公開された。なおコンツェンはアンコールでパッハ：無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ第3番からガヴョット(7日)ジーク(8日)をそれぞれ演奏。《矢澤》アンケートから 大変すばらしかった。水戸市民であることが嬉しく、誇らしかった(水戸市：無記名の方) 管・弦のアンサンブルの素晴らしさ、日本の宝(岩手県上閉伊郡：T.M.さん) MCOの管楽器の名手によるウェルカムコンサートで先ず感激。(中略)このメンバー中心のグノーの小交響曲、全くイキの合った演奏、素晴らしい(高萩市：H.O.さん) 黒い森からミューズが吹く魔法の風はメンデルスゾーン(水戸市：S.E.さん) ミリヤムさんをやさしくつみ込むような音が聞こえた(東京都：Kさん) フィレンツェの想い出の曲も大人の恋の素敵な曲でした(S.Y.さん) チャイコフスキー、むずかしい曲、合奏で完璧に演奏する、すごい!! すごすぎる!!(水戸市：Y.M.さん) 素晴らしい。一人でどうしても、亡き主人に一番先にも買ったレコード、私の一番大切な曲(註：メンデルスゾーンのこと)、何時も一緒に主人も亡くなりましたが、どうしても聞かねばと来ました。本当に皆さんありがとうございます御座居ました(日立市：N.S.さん) いつまでもMCOが続くことを願います(新治郡：H.T.さん)

あひる会合唱団演奏会(7月6日)

今年で創立53年目。この日、あひる会合唱団は、4つのステージにわたって、その長い歩みの確かさを私たちに伝えてくれました。演奏会の幕開けには、同合唱団が最も得意とするルネサンス及びバロック期の作品を演奏。続く第2ステージでは、あひる会にとって初めてとなる千原英喜作曲 混声合唱のための《おらしょ》を取り上げ、カクレキリシタンと西洋の聖歌が融合した祈りの世界を見事に歌い描きました。おらしょの演奏後、拍手の中から客席にいた作曲者の千原氏も舞台上へ。「あひる会の皆様の長い活動の時間を思わ

せるゆったりとしたテンポで歌われた おらしょ。このような悠々とした演奏を、私は初めて聴くことが出来ました」と賛辞を送りました。第3ステージはさだまさし作品集。精霊流しや北の国からなど馴染みのある名旋律で客席を和ませました。最後はハイドンの四季から“来い、のどかな春よ”など、同合唱団の30年来のレパートリーが披露されました。アンコールはモーツァルト アヴェ・ヴェルム・コルプスと、この日のために千原氏によって新たに編曲された大洗民謡、磯節。《松田》アンケートから わきあがる様な歌声をきいて、とても感動いたしました。又、是非、世俗の忙しさから、開放させていただきたいと思います。(那珂郡：S.S.さん) プログラミング、内容すべて大満足です。特に千原先生の おらしょ、磯節は感動いたしました。あひる会がひとまわりさらに実力をつけられたことを実感し嬉しく思います。益々の発展を祈念します。(日立市：F.S.さん) すばらしい! わたしもまけないようにがんばります!(ひたちなか市：Y.K.さん、10才の方)

フィオレンツァ・コッツット

メゾ・ソプラノ リサイタル(7月27日)

伝説的なメゾ・ソプラノ、コッツットの登場。イタリアの名歌手によるリサイタル自体芸術館では初めてで、チケットは完売の盛況。前日公演地大阪から移動してきたばかりのコッツットだが、リハーサルで舞台上を歩き回りよく響くスポットを見つけるとは「これ本番?」と耳を疑う熱唱をくりひろげる。演奏会の曲目は本人の希望で前半多少変更あり。その演奏会、開演前から少し疲がからんでいたため前半、曲の途中でひと息つく場面もあったが、あとは呉 恵珠のピアノ共々尻上がりに迫力を増し、後半のヴェルディはまさに地を揺るがす大熱演。「生涯現役」の大歌手に客席も興奮してブラヴァの連続、アンコール 帰れソレントへ グラナダ カタリ・カタリ の三連打に熱狂、芸術館コンサートホール史上稀な満員客席総立ちのカーテンコール。なおこの演奏会、水戸南町連合商店会の後援をいただいたが、これについては「ネタマ」をご参照ください。《矢澤》往年の大歌手を水戸で聴くことが出来、夢のようでした。当然のことながら、声は若い頃の艶と張りは失われていますが、ドラマチックな歌声は深く心に響き、感動しました。プログラムには大好きな黒田恭一さんのエッセーが載っており、とても良かったです(日立市：H.Y.さん) コッツットさんの素晴らしい歌声にただただ感無量です。はく力と、シャワーのようなエネルギーな人間性をも感じます(無記名の方) 只すすばらしく久しぶりに感激涙がこぼれストレスも吹き飛び私にとっては忘れられない日となります。有難うございました(水戸市：H.N.さん)



*nettama= ネットワークする猫。タマ。
芸術館のコンサートをサカナに
いるんなところへnettamaします。

ネットタマ夏日記

7月26日(土)いつになっても明けない梅雨。ネコらしくなく暑い夏が好きな僕にとってはどうにも気分がよろしくない。だんだんダウンな状態になって、今年の夏は、まるで今の日本の空気を象徴するかのようだ。などと思ってしまう。そうして、天気には文句をつけられないように、少なくない人が苛立ちをどこにぶつけたらいいかわからず、弱いものを攻撃したりあるいは気に入らない人を物陰から闇討ちしたりする。いやな世の中だ。

なんとも憂鬱な気分が続く中、コンサートホールATMでさわやかな演奏会を聴いた。水戸市芸術祭の一環として行われた「交響楽演奏会1」茨城交響楽団の演奏会である(「2」は8月に行われる、この欄で以前紹介したジュニア・オーケストラの演奏会)。茨城交響楽団、略して茨響は昭和35年に県内の音楽愛好家の方が結成し、以来43年の歴史を刻んできた茨城を代表するオーケストラのひとつ。昨年はサントリーホールで結成40年記念演奏会を行い、マーラーの第9という大曲に熱演を聴かせた。フル・オーケストラであることもあり、なかなか芸術館で演奏をしていただく機会がなかったのだが、この度ついに初登場していただくこととなったわけである。

曲目はモーツァルトの「魔笛」序曲とハイドンの「チェロ協奏曲 第2番(独奏は向山佳絵子さん)そしてモーツァルトの「ジュピター」。ふだんはどうしても編成の大きい曲中心になるので、芸術館ではホールのサイズに合わせ古典派の作品を選んだとのこと。僕は忍び込んで全部聴いた。初登場のオープニングを気高く力強く飾る「魔笛」序曲、そして芸術館には久しぶりの登場となった向山さんの独奏によるハイドンの感慨深く聴いた後、後半はいよいよ「ジュピター」。

冒頭から引き締まった響きで、おおっ、指揮者の井口聖一さんのもと、オーケストラは古楽アプローチを取り入れている!とびっくり。終楽章の後半繰り返しをやってくれたのも嬉しかった。あのすごいコーダになだれ込むには、くり返しによる盛り上がりがどうしてもほしい!ってわがままな聴き手の僕はいつも思っているものだから。アンコールはディヴェルティメントK136第2楽章。打ち上げ時、事務局長の橋本周さんはじめ団員の方々の表情には、茨響の新しい方向性を鳴り響かせた満足感が漂っていた。芸術館がその「場」になれたのなら、嬉しいことだなあ。

7月27日(日)天気もようやく回復し、どこからか「Fresco!」とイタリア語が聞こえる。そう今日はフィオレンツァ・コッツォットさんのリサイタル。この大歌手のリサイタルについてはレビューページを参照されたいけれど、あの興奮は今回コンサートホールにとどまらなかった。このリサイタルが水戸市の南町連合商店会に後援いただいたことはご存知のことと思う。すでにひと月前からお店をポスターが飾り、リサイタルのチケットプレゼントを知らせる広告が旗めいていた。中でも目玉は終演後のレセプション。芸術館のコンサートとしてははじめて、芸術館を離れ街の中でレセプションを行った。会場はイタリア料理店『ドンピッポ』オーナーの大内智子さんはこの企画の原動力となってくださった一人である。夕暮れ迫るお店には徐々に街の人や熱狂的なコッツォット・ファンが集まり、大歌手の登場を今や遅しと待つ。やがてタクシーから降り立つディーヴァに向けて送られる拍手の嵐。商店会会長の大橋章さんが歓迎のごあいさつを述べ、眼鏡店店主の黒沢輝子さんが水戸とイタリア語のMitò(伝説、神話)をひっかけた洒落た乾杯の音頭をとってくださり、やがて二丁目振興組

合専務理事の中村真一さん率いる南町若連太鼓のいなせなお姉さんたちが豪快な太鼓のパフォーマンスを聴かせてくれた。食事に舌鼓を打つ暇もないほど熱狂的な歓迎を受けたコッツォットさんは、感激に満ちてこう語った。「私にとって初めてのこの街に来るまで私の歌が皆さんに受け容れられるか正直不安でした。でもいつもやっていることをやろう、そう思って精一杯歌いました。そしてみなさんはこうして喜んでくださった。わたしは新しいIamic(友達)に出会えた気がします。人と人が音楽で結ばれる、こんなすてきな夜も、確かにある。」

7月30日(水)またしても雨。今日は、芸術館の近くにある、もう創業70年にもなる古いお館屋さんが店じまいすると聞き、出かけていった。常連ネコの一匹としてなんとかもぐりこむことに成功し、まもなく水戸の歴史上から消滅するお館を味わった。僕の知らない昔から受け継がれ、記憶の原形質を刺激してくるかのような懐かしさ、いていねいな仕事の施されたお館に名残を惜んでいると、奥様が「芸術館にはこれからも行きますから」といつもと同じ笑みでおっしゃる。人は出会い別れ、いつまでも同じではいられない。けれどもこれから世の中がどのように変化していても、芸術館はいつでも人と人が笑顔を交わし、考え悩み、涙して感動したり首をひねったり、要するに人の感情がいつも生き生きと行き交っている、そんな場所であり続けたいと思う。



コッツォットさんを囲む会の一コマ
(写真提供・茨城新聞社)

専属楽団メンバー関連の新譜がいくつかたまってきましたのでご紹介しましょう。まずMCOメンバーから、ヴァイオリンの久保田 巧が「エクストン」レーベルから活発に新譜をリリースしています。今年に入ってから、プロコフィエフのヴァイオリン・ソナタ ピアノ(ヴァディム・サハロフ)とのデュオ・ソナタ2曲と無伴奏ソナタ2曲 (OVCL-00099)およびパツハの無伴奏ソナタ全曲(OVCL-00119、いずれパルティータ全曲も出るのでしょう)という大物が出ました。続いてヴィオラ・メンバーが出演しているのが『ヴィオラスペース10周年記念アルバム』(BIS-KDC5001~2)。今井信子主催によるヴィオラの祭典の10周年を記念して作られた、現代作品(ペンデレツキ、リゲティ、林 光など)のみによるアルバムです。今井信子のほか、川崎雅夫、店村真積が登場。このほかにも菅沼準二、川本嘉子ら日本を代表するヴィオリストが参加して



います。またATMアンサンブルメンバーの原田幸一郎(指揮)、豊嶋泰嗣(ヴァイオリン)、上村 昇(チェロ)も登場。ミト・デラルコメンバーの鈴木秀美が結成した「オーケストラ・リベラ・クラシカ」(森田芳子も参加)は演奏会ごとにそのプログラムを録音し、CD化するというリリース・ラッシュをかけています。昨年既報の第一弾以降、今までに出ているのはハイドン:交響曲 朝 昼 晩(TDK-AD002)、ハイドン:チェロ協奏曲第1番、交響曲第44番ほか(TDK-AD003)、ハイドン:交響曲第31番、モーツァルト:交響曲第25番ほか(TDK-AD004)、ハイドン:交響曲第53番、モーツァルト:フルート協奏曲第1番ほか(TDK-AD005)の4枚。以上、お求めは芸術館内ミュージアム・ショップ「コントロールポアン」まで(TEL029-227-0492)。

information

チケットに関するお問い合わせ

...水戸芸術館チケット予約センター / 029-231-8000
営業時間 / 9:30 ~ 18:00(月曜休館)

公演内容や企画に関するお問い合わせ

...水戸芸術館音楽部門 / 029-227-8118

【ATM便り】毎月1回茨城新聞に不定期登場。

NHK-FM水戸【FM水戸アップデート】木曜日18:15頃~15分ほど(不定期登場)。水戸周辺83.2MHz、日立周辺84.2MHz。

フィオレンツァ・コッソツトリサイタル変更曲目

7月27日(日)に行われたコッソツトリサイタルの希望により、以下のようなプログラムに変更となりました。ピッチニ:歌劇 よい娘 年ごろのチェッキーナ から“頭に来る高慢ちき”/ロッシニ:歌劇 タンクレーディ から“おお祖国よ~大いなる不安と苦しみ”の後に”/滝 廉太郎: 荒城の月 /多 忠亮: 宵待草 /マスカーニ:歌劇 カヴァッレリア・ルスティカーナ から“ママも知るとおり”/ドニゼッティ:歌劇 ファヴォリータ から“では、本当なのでしょう、ああ天よ!~ああ、私のフェルディナンド!”/ヴェルディ:歌劇 トロヴァトーレ から“炎はすさまじく燃えさかり” “おびえ切った女はしばられて引立てられていった”/同:歌劇 アイダ から“ああ!...死んでしまいそうだわ...ああ!”

チケット・インフォメーション 9月7日(日)発売分

水戸室内管弦楽団第55回定期演奏会
11/8(土)18:30開演、11/9(日)14:00開演
料金(全席指定):S席¥8,000 A席¥6,000 B席¥4,500
水戸室内管弦楽団第56回定期演奏会
11/22(土)18:30開演、11/23(日)14:00開演
料金(全席指定):S席¥7,000 A席¥5,500 B席¥4,000
第55回と第56回のセット券(限定200セット):S席¥13,000 A席¥10,000

水戸室内管弦楽団定期演奏会には、9月4日(木)より友の会の先行電話予約があります。

これからの演奏会・残席情報

○...残席あり(20席以上) ...残席わずか(20席未満) x...残席なし 中央...中央ブロック 左右...裏...左右ブロックおよびステージ裏 補助...補助席

高山三智子 ピアノ・リサイタル
9/5(金) ...自由席
茨城の名手・名歌手たち 第14回
9/13(土) ...自由席
早島万紀子 オルガン・リサイタル
9/29(月) ...1F、2F
班目加奈 トランペット・リサイタル
10/4(土) ...自由席
佐藤 篤 ピアノ・リサイタル
10/18(土) ...自由席
畑中良輔の 日本のおうた セミナー 第3期
10/19(日) ...自由席、1/18(日) ...自由席
ヴェルサイユの舞踏会 バロック・ダンス・プロジェクト
10/25(土) ...中央、左右、裏
8/10(日)現在の状況です。

公演当日に残券がある場合、開演1時間前より水戸芸術館チケットカウンターでお得な学生券を発売いたします。ご購入の際には学生証(記名章)をお持ちください。公開セミナーなど、学生券のない公演もございますので、予めお問い合わせ下さい。

固定席が売り切れ次第、補助席を販売いたします。

水戸芸術館の主な9月のスケジュール

コンサートホールATM

高山三智子 ピアノ・リサイタル
9/5(金)18:30開演 料金(全席自由):¥3,500
茨城の名手・名歌手たち 第14回
9/13(土)18:00開演 料金(全席自由):¥1,500
早島万紀子 オルガン・リサイタル
9/29(月)18:30開演 料金(全席指定):A席¥3,000 B席¥2,000

エントランスホール

パイプオルガン プロムナード・コンサート
9/6(土)13:30/15:00 9/21(日)12:00/13:30
9/27(土)13:30/15:00 9/28(日)12:00/13:30
ヴァリエーションズ 茨城県内の演奏家による、さまざまな器楽や声楽が登場する演奏会シリーズ
9/7(日)12:00/13:30 メゾ・ソプラノ:山本彩子 オルガン:福富由加里
入場無料 演奏は各回20分程度です。

ACM劇場

水戸短編映像祭/水戸映画祭 03
招待上映部門(各日4プログラム)
9/13(土)「やまひ前道彦特集」ほか、9/14(日)「ショートフィルムの現在」ほか
各日13:00~
料金(全席自由)¥1,000(各回入替制)/1日有効フリーパス¥3,200
コンペティション部門
9/15(月)ノミネート作品9本ほか 12:00~
料金(全席自由):1日通し券¥1,500
(問)NPO法人シネマパンチ TEL/029(303)2360

現代美術センター

こもれび展
8/9(土)~10/5(日)9:30~18:00(入場は17:30まで)
入場料:一般¥800 前売・団体(20名以上)¥600 中学生以下、65歳以上、各種障害者手帳をお持ちの方は無料
休館日:月曜日ただし9/2(火)は臨時休館、9/15(月)は開館・9/16(火)は休館。

茨城の主な9月の演奏会

常陽藝文センター TEL/029(231)6611

後藤晴美 フルトリサイタル 9/6(土)14:30開演 (問)後藤 TEL/029(251)0699 黄金色コンサート 9/21(日)18:00開演 (問)柴草 TEL/029(226)4850

茨城県民文化センター TEL/029(241)1166

ブーケ・ド・ソン第6回演奏会 9/21(日)14:00開演 (問)鈴木 TEL/090-4543-9095 チェコ国立ブルゼーニユ歌劇場 ポヘミア・オペラ「蝶々夫人」 9/28(日)16:00開演

ひたちなか市文化会館 TEL/029(275)1122

仲道郁代の「ゴメン!遊ばせクラシック」2003 9/15(月)14:00開演

日立シビックセンター TEL/0294(24)7711

子どものためのプロムナードコンサート
「川久保賜紀ヴァイオリンのひびき」 9/12(金)18:30開演

日立市民会館 TEL/0294(22)6481

沖縄の魂の響き さんぼうふじしたいこ 残波大獅子太鼓 2003 9/28(日)18:30開演

大宮町文化センター・ロゼホール TEL/0295(53)7200

沖縄残波大獅子太鼓 2003 9/26(金)18:30開演

ギター文化館 TEL/0299(46)2457

常味裕司 ウードリサイタル 9/14(日)15:00開演

ノバホール TEL/029(852)5881

つくばフィル合唱団 創立20周年記念 第31回コンサート 9/23(火)14:00開演

水戸芸術館音楽紙[ヴィーヴォ]

2003年9月発行 第92号

編集・発行/水戸芸術館音楽部門 〒310-0063 茨城県水戸市五軒町1-6-8

TEL:029-227-8118 FAX:029-227-8130

e-mail [ankmr@arttowermito.or.jp] URL [http://www.arttowermito.or.jp]

編集/水戸芸術館音楽部門(五十音順):関根哲也 中崎美智代 中村 晃 馬場千恵

松田善幸 矢澤孝樹(編集長)

DTP / office west

印刷所 / 株式会社あけぼの印刷社

次号は...ヴェルサイユでダンス!ダンス!